

安産祈願

夕焼け色のタツノオトシゴ

彼は

妻が作ってくれた卵を

大切に 丁重に

育児囊に入れ

孵化するときを待っていた

大気は

限りなく優しく吹き続け

地球を何周もしている

夕焼け色の父は

あちらへ こちらへと

地球上のあらゆるものを見物しながら

漂っていた

青紫の雲たちは

彼のために

特製の寝床を準備したよ

柔らかくて 弾力のある

エアロベッド！

ねえ、オーロラ

天井の産卵を

見にいらいっしやいな

わたしは

大西洋を航行する

フェリーの甲板に立ち

彼の安産を祈った

螺旋階段

ある日息子が生まれた
母は寛容な大地であり
父は慈しみを与える雨であった
父母は至るところで出会い
父は母の広大なからだへと
ゆっくり同化していき
母は全てを優しく受け止めた

ある日息子が生まれた
好奇心を持ち
勇敢で
彼の瞳はダイヤモンドのように
輝いていた

ある日息子が
漆黒の闇夜に
何千、何万个と散りばめられていた
自分の瞳のようなダイヤモンド
を見ると
どうしても空へ上ってみたいくなり
何か方法はないかと
周りを見回してみた

美しい ならかな曲線を描く
小高い丘である母の乳房のあたりから
天へ向かって螺旋階段が伸びていた

一歩 一歩 上る

半分くらい来たところで

遙か下を見下ろすと

父は 大海の水面をキラキラ輝かせて

海豚や魚達を躍らせながら

母は 柔らかな緑の絨毯から

色とりどりの花々を咲かせて

祝福してくれていた

上っていくその先には

今まで見たこともない深い暗黒が

広がっていた

父母のいる地へ戻ろうか……

迷ったが どうしても上へ行きたかった

手を伸ばして

一番近くで輝いていたダイヤモンドを

取り お守りにポケットへ入れた

一歩一歩上り

頂上で 安心のため息をついた

ここが天辺だ！

記念に名前を残していきたかった

ポケットのダイヤモンドは

星星に暖められ

小さな塊になっていた

その石墨となった小さな筆記用具をつかむ

と

息子は

宇宙に大きく

自分の名前を刻んだのだった

たぶん 重力のせい

その名前は地上に落ち
父と母の上で砕け
何千億というカケラが
世界中に散らばった

それ以来

新しい子供が生まれるたびに
世界中の親たちは
空から降ってきた名前のカケラ
すなわち

勇気、喜びの混ざった
シア ワ セ と

自分たちの無条件の愛
を混ぜて

子供に名前をつけている

原始の海

窓ガラスや鏡に

自分の姿が見えていなかった

幽霊は己の姿を見ることができない
というが

私は幽霊でないと

自信を持って言えるだろうか

巨大な自意識が詰まった

精神の塊にすぎない

のではないか

自分を問い詰めて 自問して

分厚い記憶の層に辿り着いた

本当に厚いのだ

玉葱の皮をむくように

一枚一枚 記憶の層をめくる

水分を含んだ薄く透明なスキンが

涙腺を攻撃し

涙があふれてしまうように

私の黒い瞳は

満潮時に姿が見えなくなる小さな島となり

涙の海に埋もれた

それでも なお

ページをめくる

どんだんめくっていく

さらに なお もっと

ひたすらめくっていく……

記憶の塊が小さくなるにつれ

つまり

昔々へと遡るにつれ

涙腺への攻撃はいつのまにか影をひそめ

悲しみ 嘆き 後悔という概念は消え

ひとつの事実が姿を現した

私は

進化という過程で

偶然生まれてきた

一つの生物

なのだ

どなたか

原始の海は

私達の涙のように

塩辛い

かどうか

ご存知ないですか？